令和 3 年 12 月 7 日

学位請求論文（課程博士）審査報告

学位請求論文：築造方法から見た横穴式古墳の研究（畿内地域を中心に）
学位請求者　：文学研究科歴史学専攻博士後期課程　李　東奎

審査委員
主査　専修大学文学部　　教授　土生田　純之　㊞

副査　専修大学文学部　　教授　高久　健二　　㊞

副査　群馬県立歴史博物館　館長　右島　和夫　　㊞

審査委員会は、提出された本論文を問題関心、研究の先進性、論文構成の説得性、研究の到達点、考古資料収集の広さと実証性、今後の展望などを中心に審査した。また、口述試験において、直接、請求者本人より上記の審査観点について質問し、判断材料を得た。

１．論文の骨子と評価

本論文は、5 世紀後半～8 世紀初頭の畿内地域における横穴式古墳を対象として、その系譜と導入プロセス、構造と構築方法などについて検討したものである。

第 1 章では、まず、これまでの研究動向をまとめ、横穴式石室をもつ古墳には埋葬主体施設である石室と石槨だけでなく、墳丘、石室、墓域施設など築造に関連する様々な要素があることを指摘する。このような古墳を横穴式古墳と命名し、横穴式埋葬主体（石室・石槨）の築造方法だけでなく、各要素を総合的に検討する必要性を指摘している。また、畿内地域における横穴式古墳の築造方法を中心に検討するという研究目的と各章の具体的な検討内容、研究の対象となる時間的･空間的範囲が的確に述べられている。

第 2 章では、畿内地域における初期横穴石室の導入過程を把握するため、東アジア的視点から起源と系統を通時的に整理し、とくに導入と伝播に関する時期の問題を中心に検討をおこなっている。具体的には、2 世紀中葉に中国の東北地方に登場した横穴式石室は、楽浪郡と帯方郡に移住した移民によって様々な構造と築造形態が伝えられ、3 世紀末～4 世紀初頭にある程度定型化した横穴式石室が造営される。そして、4 世紀中葉に百済の中央地域に導入された板橋型石室が、5 世紀後半に倭の畿内地域に導入される。そして、初期横穴式石室は短時間で日本の支配層の新しい墓制として受け入れられ、在地化される過程で、弥生時代の大型墳丘墓から受け継がれた伝統的な墳丘と規模の重視、竪穴式埋葬主体施設の位置が結合することにより、異なる様相に変化し展開するという指摘がなされている。畿内地域の初期横穴式石室墓の系譜に関する研究史を整理したうえで、遼東地域、楽浪地域、百済漢城期中央地域、畿内地域における横穴式石室の具体的な変遷過程・年代論を再検討して、各地域における横穴式石室の系譜・出現の契機を明らかにしている点が評価できる。

第 3 章では、墳丘における石室の位置について、死生観・心性面・技術面の 3 つの観点から検討をおこなっている。支配層の横穴式古墳は、巨大な墳丘（前方後円墳）内部に埋葬主体施設である石室と石槨が位置する地上式の構造をもつ点が特徴であるとし、墳丘内部における石室の位置および墓域に樹立された埴輪の種類と数量は造営時期と関連すると指摘する。とくに土木技術的な観点から墳丘と石室を検討した結果、古墳の造営と変遷過程には技術面における困難があったことを明らかにする。技術的な限界を克服し古墳の観念的な部分を具現化するためには、それに対応する技術力が必要となる。技術的

欠陥により古墳が崩壊する事例にも言及し、築造にあたっては死生観と心性面といった観念的部分以上に技術的な部分が重要であったと解釈している。横穴式古墳築造に関する研究史をふまえて、死生観的観点、心性面的観点、技術的観点から墳丘と横穴式石室の位置関係を検討している点が注目される。とくに、畿内地域における横穴式石室と墳丘の関係を平面と立面から時期別に検討したうえで、横穴室石室の登場と巨大化、墳丘における石室位置の変化、前方後円墳と埴輪造営の終了の背景について、死生観的観点、心性面的観点、技術的観点を有機的に結び付けて解釈している点が評価される。

第 4 章では、畿内型石室の築造方法のうち、奥壁と側壁の用石法を中心に、石室構造の変遷過程を検討している。石室の表面より裏面の様相のほうが横穴式石室の構造を明確に把握できるとし、裏面の用石法に注目して検討をおこなっている。その結果、石室表面に現れる用石法と、裏面の様相とが異なるということを明らかにし、壁体構造に対する再検討の必要性を指摘している。そのうえで百済漢城期の板橋型石室、初期横穴式石室、畿内型石室の比較検討をおこない、時期によって石材の規模は大きく変化するが、築造方法はほとんど変わらないことを論じている。そして、6 世紀第 3 四半期～7 世紀前半の横穴式石室に、奥壁の 1 段目だけでなく 2 段目も立積された事例が存在することを指摘し、これは石室規模の大型化、とくに石室の天井高の急激な上昇と関連すると推定している。また、建築工学的観点から、築造時における構造的脆弱性の克服のため、側壁が石室天井を含む墳丘の荷重を支えていたことが側壁石材の巨大化の原因であると論じる。横穴式石室の壁体構造の築造方法と石材の形態変遷について検討しており、本論の中核をなす部分である。とくに、壁体の表面と裏面の構築形態が確認できる横穴式石室を選定し、既存の図面・写真だけでなく石室の直接的観察を通して壁体構造を詳細に検討している点が評価できる。その結果、百済漢城期の中央地域における板橋型石室と畿内地域における初期横穴式石室は同一の技術によって壁体を構築していることを明らかにした点が注目される。また、壁体裏面の構造については現地調査の結果に基づいて概念図を作成して時期的な変化を明らかにしている点に独自性がある。

第 5 章では、横穴式古墳のうち榛原石を使用する磚積式古墳について検討をおこなっている。磚積式古墳は古墳時代終末期に築造されたものであり、これまで様々な観点から研究がおこなわれてきたが、現在も名称が統一されていないなどの問題点を指摘し、直接的な観察にもとづき用語・石材・類型設定の再検討をおこなっている。用語に関しては、磚積式古墳とこれより下位の概念として、磚積式石槨、磚積式石室という名称を提案している。また石材については、磚積式古墳に使われた石材は榛原石または室生火山岩であるという等式は成立しないとする。地域ごとに石材加工度、漆喰の使用有無、石種の多様性が確認され、階層差が重要な要素となることを指摘している。いまだ評価が定まっていない磚積式古墳の型式分類と編年をおこない、変遷過程を明らかにしている点が評価できる。

第 6 章では、新しい築造工法である版築を用いた古墳について、日韓の比較を通じて、その意味について検討している。韓国では益山双陵が唯一の例として知られているが、益山双陵の発掘調査結果や弥勒寺址の石塔に関する研究などを総合的に検討した結果、益山双陵の全体的な構造は弥勒寺址石塔の基壇部の築造工程と共通することから、埋葬主体施設の位置と構造が塔と類似していることを指摘する。すなわち、益山双陵は塔のモチーフ（構造と意味）を借用して築造されており、版築は塔楼（塔身）を表現していると推定している。一方、日本では王（天皇）や王族など最上位の古墳を中心に墳丘全体に版築が用いられ、八角墳、円墳、方墳といった様々な墳形が確認されている。墳丘の構造と構築工程は共通しており、7 世紀後半になると墳丘下段または一部のみに版築が用いられた古墳と、墳丘全体に版築が用いられた古墳が確認できるとした。八角墳の形態は塔楼（塔身）を意図した可能性が高いとし、仏教を基盤とした王権の強化を最も象徴的に示す構造物であるととらえる。百済の武王を埋葬した双陵が塔をモチーフとして築造されたと解釈している点は新しい見解である。また、日本の天皇クラスの古墳である八角形墳の墳丘全体を版築で築造した背景には、権威を誇示する目的があったと指摘している点も注目される。

第 7 章の結論では、畿内地域の横穴式古墳は支配層の政治的･社会的な要求により戦略的に導入された墓制であり、在地化により加えられた墳丘の墳形と規模からは内部統合および他地域との格差が確認

できるとする。内部主体施設である横穴式の石室と石槨は、東アジア秩序に組み込まれていることを内外に示す効果的な建築物であり、その築造に新しい技術と思想を取り入れ続けた。そして、横穴式古墳は畿内中心の古代国家体制が完備され、古墳の築造が終焉を迎える 8 世紀初頭まで造営された代表的な墓制として評価している。東アジア的な視点から、畿内地域における横穴式古墳の再解釈を試みようとする点が本論文の最大の特徴である。とくに近年、新たに調査された百済の板橋洞古墳群、甘一洞古墳群、益山双陵、弥勒寺跡など韓国考古学の最新データに照らし合わせて、畿内の横穴式古墳の系譜および構築技術を解明しようとした点に大きな意義がある。

２．課題と今後の展望

本論文は，以上のような成果がありながらも、いくつかの課題も残された。

まず、研究史の整理においては、古墳築造に関するこれまでの研究の到達点を明らかにしたうえで、問題点を指摘する必要がある。また、石室は開口部からみた場合と奥壁側からみた場合では異なっており、この点についても考慮すべきである。本研究は畿内地域を中心に取り扱っているが、その前提として畿内の地域性を整理する必要がある。すなわち、畿内を列島のなかでどのような地域として評価するのかが、畿内と列島の横穴式古墳の関係を理解することにつながる。また、日本列島はその地理的特性から伝播経路が複雑であり、より詳細な地域間の比較検討も必要である。

今後は古墳築造体制や石室工人集団という視点を加えることによって、新たな解釈や石室の多様性の解明につながるであろう。また、畿内地域だけでなく、北部九州など列島各地へと視野を広げることによって、畿内の横穴式古墳の相対化が可能となる。比較対象地域についても百済だけでなく、高句麗や加耶などとの関係についても検討することによって、古墳時代における対外関係の多様性の解明へとつながるだろう。また、文献史学における研究成果との対比も今後の課題である。

３．口述試験

口述試験は、土生田、高久、右島の三委員によって実施された。主査の土生田は総合的観点から、副査の高久は朝鮮半島の考古学的観点から、同じく副査の右島は横穴式石室研究の観点から質疑応答をおこなった。各委員の総括的質問と個別的質問に対して、本論文提出者は明確に応答し、十分な対応がなされたと判断した。なお傍聴者は本学の大学院生を中心に14名であった。

以上，学位請求論文ならびに口頭試問などを総合的に判断して、審査者三名は一致して、李東奎氏に博士（歴史学）の学位を授与することを認める結論に達した。

以上